

きのこリウム

樋口 和智 (gracilis-works)

きのこリウムとは

“きのこリウム”はキノコをガラス容器内で育てるテラリウムであり、アート作品でもあります。

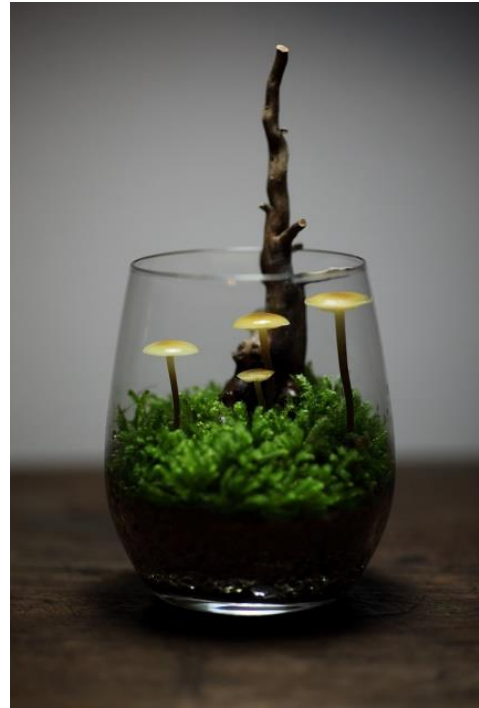
キノコをレイアウト素材の一つと捉え、小さなガラス容器の中に自然を再現する、というコンセプトで作品づくりをしています。

キノコが生えている期間はとても短く、1~2週間ほど。出来上がった情景はとてもはかないのですが、キノコが創り出す造形はとても美しく、神秘的で、人を惹き付けるものがあります。

キノコの部分は子実体と呼ばれ、植物で言う花のようなものです。子実体が枯れてしまっても本体の菌糸体が死んでしまうわけではありません。菌糸体が生きている限り、キノコは複数回出てきます。実際、私の作品においても1年に2~3回のキノコが発生します。

キノコや苔を育て、景色をデザインし、小さなガラス容器の中に自然の一部を切り取ったかのような景色が出来上がった時は感動もひとしお。

育てる楽しみ、創り出す楽しみ、両方を味わいながら日々作品づくりに勤しんでいます。



生きている状態のキノコを『魅せる』

2018年1月よりきのこリウムの展示会を行っています。(今回の共生のひろばで4回目)

エノキタケ、ナメコ、白ヒラタケ、ヌメリシギタケなど、栽培目的で市販されている品種を利用し、会期に合わせて子実体を発生させ、生きた状態のキノコを展示しています。観覧者は本物のキノコであることに驚き、エノキタケなどについてはスーパーで売っている状態のものとはずいぶん違った見目に驚かれます。



2019年2月11日共生のひろばにて

今後の活動展望

通常、展覧会などでキノコを展示する際には、凍結乾燥し樹脂などでコーティングすることによって標本化したものを使用したり、山で採取してきたものを利用したりします。ただこの方法だと形が変形してしまったり、色が退色してしまったりして本来の見た目とはずいぶん変わってしまいます。

キノコの生態や容姿を観覧者に正確に伝えるためには生きた状態を見せることほど有効な手段はありません。

現在きのこリウムでは『魅せる』ことに重点を置き作品づくりを行っていますが、本来のキノコの生育環境を再現し本物のキノコを生きた状態で展示することで、生態をアカデミックな視点から見せる、といったようなことにも今後取り組んで行ければと考えています。